



木幡 武子さん(権現堂)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山
取材日：3月3日

富沢酒店頑張っています

栃木県足利市で避難生活を送られている木幡武子さん。お会いすると実年齢より5歳から6歳は確実に若く見える元気のよい方です。マンションのご自宅をお伺いしたとき、お店でもないのに表札に富沢酒店と書かれていました。現在は息子さんそして商品のお酒と暮らしています。



▲今でも酒屋の看板娘

震災前は浪江町権現堂で富沢酒店を営んでいました。現在は息子が3代目の店主になっていて、創業した親の代から数える90年の歴史がある店です。震災時は商品はもちろんのこと、家屋自体もダメージを受けました。今はあれからさらに2年間放置状態が続いていますので、避難生活が終わっても家の損傷が進んで家に住めるのかとても心配です。

震災後、避難することになった福島市、日光市と避難しましたが、足利市の娘夫婦が住んでいるマンションの隣が空いているというので、そこに住むようになり現在に至っています。玄関の表札に富沢酒店と書かれているのは、現在店舗での販売はできないのですが、ネットによる通販は避難生活でも行えるので、座敷に通販用のお酒をおいて営業しています。しかし、風評被害の影響は大きく、安全なものにも関わらず福島県産のお酒は人気低迷し、ネットの販売だけをとても震災前の1割未満に落ち込んでしまいました。

私が若いころはまだおらかな時代で、店の中にもつきりと言ってお酒の立飲みをする場所があつて、夕方になると仕事帰りに一杯酒を飲むお客さんがたくさんいて、賑やかな時代がありました。今は時代が厳しくなつて気軽に酒を飲むに来る人が減ってしまいましたね。

震災前は商売で忙しい日々を送っていた私も、避難生活においてはあまりやるべきことがなくなり、昼寝をすることが多くなつたように思います。最近の楽しい思い出は、昨年10月に浪

江町や富岡町の友人たちで、飯坂温泉に集まり楽しいひと時を送りました。これからも皆さんと定期的に集まることができればと思っています。

いまの私の心の支えは、皆さんで震災前に住んでいた場所に戻り、権現堂の富沢酒店を再開し元の暮らしを手にすることです。特別でも何でも無い震災前にあつた日常の生活を取り戻せることを、夢見て生きて行きたいと思っています。

浪江のこころ通信



・第22号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第22号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218





谷田 きよさん(権現堂)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 新保
取材日：3月7日

避難生活の思いを後世に伝えたい

谷田さんは、現在新潟県柏崎市内で単身生活を送っています。4月下旬から、同じ柏崎市内で娘さん夫婦と一緒に新生活を始める予定です。

■震災発生から避難先の柏崎市の生活
震災発生後、当時妊娠4カ月だった娘と一緒に南相馬市へ一時避難しました。そのとき、新潟県刈羽村に働いていた息子が南相馬市まで助けに来てくれ、一緒に柏崎市へ避難しました。当時は、ガソリンを調達するのにとても苦労したのを覚えています。

柏崎市へ避難してきてから、昨年4月に夫が病気で他界、また同じ時期に私の身体にも病気が見つかってしまいました。現在、身体の方は少しずつ回復していますが、避難生活と重なり精神的にも辛い日々が続いてきました。

柏崎市では、浪江町から避難してきている人たちが集まる「浪江町コスモスの会」に参加しています。毎月第2・第4水曜日、30名ほどの仲間たちと一緒に、紙切りや絵手紙を作ったりしてコミュニケーションをとっています。

また、私は避難生活で感じたことやその時々思ったことを詩や絵に残しています。今では、その数が50以上になりました。



▲新生活に期待する谷田さん



▲谷田さんが書き留めている作品

今後このような詩や絵を書き続け、後世に伝えていきたいと思っています。

■浪江町への思い
昨年7月28日に浪江町へ一時帰宅した際、笑い声やしゃべり声をすべてなくしてしまつた静まり返つた町を見てとても悲しくなりました。「家」というのは、人が1年も住まないといぼるぼろになるものだ実感し、せめてもと思ひ他界した夫の写真を静まり返つた我が家の仏間に置いてきました。今年の3月10日には柏崎市の方へ戻り哀悼の会へ参加します。

東日本大震災が発生してから2年：2年も経つと、浪江の心は忘れてはいませんが、ここ(柏崎市)の人間になつてしまつていく気がします。

柏崎市は、春は山菜取り、夏は海で魚釣り、秋はきのこ取りなどができる素敵な所ですが、雪の降る冬の生活だけはまだ慣れません。青い空が広がる、浜通りの温暖な冬がなつかしいです。



半谷 正彦さん(大堀)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：3月11日

「浪江のキャニオンワークスは、今日も元気に頑張っています」 そのことを浪江の皆さんに伝えたい

半谷正彦さんご家族は、浪江町当時の従業員の方々や親族とともに群馬県千代田町で事業を再開しています。これから先のことへの不安もあるなか、みんなで力を合わせて家業である縫製業を元気に守り続けています。お話しは正彦さん、妹の荒木美幸さん、半谷美也子さんからお聞きしました。



▲左から美也子さん、美幸さん、正彦さん

父である会長の早い決断もあり、震災直後の4月から事業再開の準備に入りました。取引先だった群馬県の企業から工場を借りることができ、7月21日には再スタートすることができました。工場は浪江のときの規模には及びませんが、当時の従業員であった親族とともにこの土地に移り、外国人研修生も含めてみんなで元気に頑張っています。幼いころからミシンの音のする工場の中で育つたようなも

のですので、やっぱりこの環境は自分たちの元気の源です。もし事業を再開せず、今も仕事もなく過ごしていたら、自分たちはどうなっていたのかと思います。何か頑張れるものがあるという事は、本当にありがたいことです。

浪江で思い出されるのは、夏の星空とカエルの合唱、そして美しいホタル。本当にきれいでした。何だか空の青さも違うように感じられます。浪江は食べ物や自然が本当に豊かなところだったと、外に出て初めて実感しています。社会人野球チームにも入っていたので、練習や試合が終われば、毎週末バーベキューで盛り上がっていたことが懐かしいです。焼き肉の匂いにつられて、自然と人が集まっていたことが、つい昨日のことのようです。しかし今は、気軽にバーベキューもできないし、集うはずの仲間たちも離ればなれです。

最近、一時立ち入りで浪江に入るたびに、荒れ果てた地域の姿をみるとつらい思いに駆られます。もうあのころの暮らしは戻ってこないのではないかと。できれば福島県内には戻りたいという気持ちもありますが、浪江でなければどこでも同じようにも思えてきます。子どもの安全のこと、そして新しい土地に馴染んでいる子どもを考えると、そう簡単にはこの場所を動けない。

両親は、いつになるかわからないけれど、最後は必ず浪江の自宅に戻りたいと言っています。そんなことを語り合いながら、今後については、親族の中でも意見が分かれるところです。いつそのこと「もう浪江には戻れない」と言ってくれた方がいいのにと、思うことさえあります。ただこの震災のことは、絶対に風化させることなく、子どもたちには伝えていく必要があると思っています。

とにかく今は、浪江のキャニオンワークスとして、この土地で元気に頑張ることが自分たちができることと思っています。



伊藤 京子さん(川添)

取材者：一般社団法人葛力創造舎 下枝
取材日：3月13日

もっと笑いあいたい

浪江町川添南上ノ原から郡山市に避難中の伊藤さん。混乱から新しい生活を築きなおしています。



■浪江での生活はいかがでしたか
長期の休みになると、家族が集まりました。家族全員、孫までみんな魚釣りが大好きで、相馬、請戸、いわきと釣りにいきました。小名浜で花火大会があるときは、夜釣りをしながら堤防から花火をみるのが楽しみの一つでした。魚も好きで、どんなの煮つけも思い出のお料理です。

震災の日、接骨院から帰ろうとしていたときでした。治療
■震災時から今まではどうでしたか
震災の日は、接骨院から帰ろうとしていたときでした。治療
たか
震災の日、接骨院から帰ろうとしていたときでした。治療

■現在の生活はいかがですか
現在は郡山市に住んでいます。近所に富岡町の知り合いがいたり、県外に避難していた大事な友だちが郡山に戻ってきたので安心しました。私は車に乗れないので、その友人夫婦の車に乗せてもらって二本松の役場などに行ったりしています。

■いま感じていることを教えてください
一人でいるのは困るまでではないけれど、やはり寂しいですね。すぐに、しゃべれる相手がない。なにより笑うことが減りました。いろいろイベントがあるようだけれど、足が確保できなかったり、路線バスなどに慣れていないのでなかなか行きづらいです。浪江町の郡山自治会が発足したけれどなかなか動きが見えない。もっと動きがあってもいいのではないかと思います。

復興住宅を早くつくっていたらいいですね。マンションではなく、小さな畑でもいいので、庭いじりしながら家族と一緒に住みたいですね。



木幡サチ子さん(立野)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内
取材日：3月7日

私は人を元気にすることが大好き！



▲自宅でエステの仕事をしているサチ子さん



▲仲間に送っている手作り新聞

その日は次女の中学の卒業式でした。卒業式を終え、娘と二人、外でランチを済ませ自宅に着いたと同時に震災が起きました。まだ着替えもしていませんでした。翌日の夕方、避難命令に従い主人、次女、母、妹、叔母、そして長女家族と一緒に避難所に行きましたが、そこはすでに大勢の人。仕方なく私たちは、車中で一泊し、翌日、妹が住んでいるつくばに、そして長女家族は、末の妹のいる千葉の鎌ヶ谷に避難しました。つくばで10日ほどお世話になり、その後、長女が3人目の出産間近だつ

たこともあり、長女の夫が勤めていた系列会社の配慮もあり、東金市長や議員さんが親身になって探してくださったアパートを借上げ住宅にさせていただきました。それぞれ移ることができました。その後一軒家に移りましたが、主人と息子は福島で働いているので、次女のありさと2人暮らしです。母は、そのままつくばで生活しています。畑を借り、野菜を育て、土に触れることが何より楽しいようです。当初は東金と一緒に暮らす予定でしたが、お茶のみ友だちもできて、つくばが気に入ったのか、こちらに来る様子があります。母が元気なうちは、こちらから会いに行きます。

東金での暮らしが、ようやく落ち着いてきたところ、他にも避難している人たちがいるのではないかと、浪江町だけでなく、ほかの町の人も近くにいたのでないだろうかと思ひ、東金市役所に避難者情報を伺ったのですが、教えてもらえませんでした。そんな矢先、「茶話会」が行われ近隣に避難している人たちと会うことができました。参加された人たちは、それをきっかけに今も交流が続いています。「茶話会」後も、どうしているかと、一人ひとり訪ね歩きました。中には部屋に閉じこもっている人もいたので、今度はみんな花

見や楽しいことを一緒にできたらと思っています。12月ごろからは自宅でエステの仕事再開しています。皆さんに知っていただこうとチラシをまいたりしましたが、なんの反応もなく、知らない土地で仕事を再開する大変さを実感しています。あまりにも長い避難生活でこれから先のことはどうなるかわかりませんが、今のところはここで頑張ります。娘も保育士になりたいと希望を持って学校生活を送っています。

私は、周りからよく「避難者に見えないね」と言われます。マイナスなことばかり考えていると落ち込んでしまうので、自分から前に進んでいくようにしたいと思っています。浪江にいたころ、長く働いていた会社で、会社を元気にしたいと思い、よさこいチームを立ち上げ、桜まつりや老人施設の慰問などをしていくことができました。今は南相馬の日本舞踊の先生を中心にみんなで稽古し、福祉施設の慰問をしています。また、みんなと繋がりたいと思ひ「がんばっぺ新聞」という手作りの新聞を浪江の仲間配ったりしています。

私は人を元気にすることが大好き！元気でいると、周りの人も元気になる、そう思いながら過ごしています。